

「建築の 理学の精華 かぐわしき」

高橋 治



写真1 博士公聴会後の懇親会：九段会館（2006年）



写真2 高橋研究室に届いた平野先生からの御祝（2015年）

ここに一枚の写真がある。テーブルには、御祝のビールや御酒が並んでいる。2006年10月13日の九段会館、それぞれが語る建築構造の話題に耳を傾けた。僕は笑顔の恩師、平野道勝（東京理科大学名誉教授）の横で少し緊張し、寺本隆幸（東京理科大学教授）の講評を深妙に聞いた。後姿は、博士論文審査の主査として平野研究室出身の僕を指導いただいた松崎育弘氏（東京理科大学教授）。そもそも、博士取得に進んだのは藤田隆史・東京大学教授との居酒屋でのやり取りであった。「そろそろ博士論文をまとめたらどうだ？ 俺があげようか？」。次の日に電話があり、「昨日酔っぱらって約束したよね？ やはり博士は母校で取った方が良いよ。平野先生が引退してんなら、松崎先生に言っとくよ」と。その後、松崎先生から研究室に遊びに来るように呼ばれ、「今までの論文が結構あるなあ。これなら、論文博士でいけそうだな」と、その場で決めてもらった。論文の整理が進むと、「理科大の論文博士は前例も少ないから、審査委員はいつもの倍以上用意していた」と言われ、最終的に主査は松

崎育弘教授、東京理科大学の工学部Ⅰ部から伊藤裕久教授、倉渕隆教授、篠崎祐三教授、Ⅱ部から寺本隆幸教授、理工学部から北村春幸教授、東京大学から藤田隆史教授に審査いただいた（肩書は当時）。

当時のALL理科大での審査で、この時に理科大への愛情が、より強まった気がする。以後、博士の名に恥じないように実務を重ね、7年前に母校の教授として戻ってきた。

今は、少しでも多くの建築愛、そして、理科大愛に満ちた建築家やエンジニアなどが、建築×理学の精華で未来や社会を築くべく日々を過ごしている。博士公聴会でも平野先生は、喜んでくれた。教授になり、研究室を構えた時には御祝いの書籍を送ってくれた。書籍は『趣味の構造力学』と、『構造物の技術史—構造物の資料集成・事典である。今は、偶然にも神楽坂で平野先生が使用していたグレーの重厚な鉄製の本棚が高橋研究室に並んでいる。研究室を構えた時に、本当に偶然に教授室に鎮座されてあった。平野先生が訪れた時も「この本棚の文字は、私の文字だね」と言っていた。その本棚に、

御祝の本も陳列させていただいた。

今後10年は、まず大学で教育と研究を実践主義の理科大らしく進めていかないといけない宿命や運命を肌で、背で、視線で期待を感じる。実践のための大学発ベンチャー企業「サイエンス構造」も大学が用意してくれた。設計事務所としてだけでなく、最近では建設業の許可も得た。理科大OBをはじめ、国内や世界の建築に関わるArchitect、Structural Engineer、Contractor、Builderらが集結する場を創造して社会を築いていきたい。人生はそんなに力まなくても、天上で見守る誰かや世の中の先人らが役割を決めてボールを投げってくる。バトンが渡され、活躍の場もくれている気がする。僕たちはただこのまま立っているだけで良い、と感じている。力まずに自然体で。

（今回は井戸川 隆一氏）

（たかはし・おさむ）

1967年生まれ 東京都出身 東京理科大学大学院工学研究科修士 構造計画研究所を経て、現在東京理科大学教授 博士（工学）一級建築士 構造設計一級建築士 趣味はマラソン

